

一般論文

短期大学学生の音楽志向・スポーツ志向・性格特性の関連性の分析(2)

－活動性の高さに着目して－

Analysis of Relationship between Music Consciousness, Sports Consciousness and Characteristic Features of Junior College Students(2)

－Focusing on Activity Characteristics－

澤田 優子、澤田 孝二

Yuko SAWADA, Koji SAWADA

概要

学生の活動性の高さとスポーツ志向・音楽志向の関連性の分析を通して、(1)活動的な性格特性をもつ者はそうでない者に比べて、音楽を聴くことを好む者、歌を歌うことを好む者、これまで音楽の成績が良かった者が多い傾向にあること、(2)楽器の演奏の好き嫌いに関しては、活動性の高い者とそうでない者で大きな差がみられないこと、(3)活動的な性格特性をもつ者はそうでない者に比べて、スポーツへの関心が高い者、スポーツの実践を好む者、これまで体育の成績が良かった者が多い傾向にあること、などが明らかになった。

キーワード：活動性、音楽志向、スポーツ志向

1. はじめに

筆者らは、短期大学学生を対象として音楽志向、スポーツ志向、性格特性の関連性についての調査を実施しており、第1報においては、音楽への興味が高い者ほど音楽への取り組みが積極的で、音楽の成績も良い傾向にあることや、スポーツへの関心の高い者ほどスポーツに積極的に取り組み、体育の成績も良い傾向にあること、活発・協調的・ねばり強い・明朗などの性格特性をもつ者ではそうでない者に比べて、スポーツへの関心が高く、スポーツ実践を好む傾向にあることなどを報告¹⁾した。

第2報においては、性格特性のうち活動性の高低に着目し、活動性が高い学生とそうでない学生で音楽やスポーツに対する志向に違いがないかどうかを分析したので、その概要を報告することにした。

音楽能力と運動能力の関連性、音楽聴取の運動

能力やスポーツ活動への影響、音楽の好みと性格特性の関連性等についての先行研究には、岡²⁾による中学生の音楽的能力と運動能力の関係についての研究、麻³⁾による音楽聴取と身体運動能力の関連性についての研究、杵⁴⁾によるスポーツ実践者の音楽聴取による効果についての研究、広瀬⁵⁾による大学生の音楽の好みと性格の関連性についての研究などがある。

2. 方法

2017年5月に保育系短期大学学生159名を対象として、音楽志向、スポーツ志向、性格特性に関する調査を実施し、159名全員から回答が得られた。

調査項目は、音楽を聴くことの好き嫌い、聴くことの好きな音楽のジャンル、歌を歌うことの好き嫌い、歌うことが好きな歌のジャンル、楽器演奏の好き嫌い、演奏することの好きな楽器の種類、今までの音楽の成績、スポーツへの関心、関心の

あるスポーツ種目、スポーツ実践の好き嫌い、実践したいスポーツ種目、今までの体育の成績、性格特性（活動性、気分の安定性、協調性、ねばり強さ、温厚性、緻密さ、明朗さ）である。

分析は、性格特性のうち活動性についての回答結果に基づいて、活動性が高いと回答した78名を活動群、残りの81名を対照群として、両群の音楽志向、スポーツ志向の回答結果を比較した。さらに学生一人一人の音楽志向、スポーツ志向の回答結果をそれぞれスコアに置き換えて数字で表わし、両群のスコアの平均に統計的な有意差がないかどうか、 t 検定⁹⁾を用いて調べた。

尚、音楽志向ならびにスポーツ志向に関する7つの質問項目で基準としたスコアは表1に示すとおりである。

表1 音楽志向ならびにスポーツ志向に関する各質問項目のスコア

	区 分	スコア
音楽を聴くことの好き嫌い	音楽を聴くのが大変好きである	4
	どちらかというとき好きである	3
	どちらかというとき嫌いである	2
	嫌いである	1
歌を歌うことの好き嫌い	歌を歌うのが大変好きである	4
	どちらかというとき好きである	3
	どちらかというとき嫌いである	2
	嫌いである	1
楽器の演奏の好き嫌い	楽器の演奏が大変好きである	4
	どちらかというとき好きである	3
	どちらかというとき嫌いである	2
	嫌いである	1
子どもの頃の音楽の成績	音楽の成績がとても良かった	5
	どちらかというとき良かった	4
	ふつうだった	3
	どちらかというとき悪かった	2
	悪かった	1
スポーツへの関心	スポーツに大変関心がある	4
	どちらかというとき関心がある	3
	どちらかというとき関心がない	2
	関心がない	1
スポーツ実践の好き嫌い	スポーツをするのが大変好き	4
	どちらかというとき好きである	3
	どちらかというとき嫌いである	2
	嫌いである	1
子どもの頃の体育の成績	体育の成績がとても良かった	5
	どちらかというとき良かった	4
	ふつうだった	3
	どちらかというとき悪かった	2
	悪かった	1

3. 結果と考察

(1) 両群の「音楽を聴くことの好き嫌い」についての回答結果

音楽を聴くことの好き嫌いについての回答結果をみると、活動群では「大変好き」が87%、「どちらかというとき好き」が13%、「どちらかというとき嫌い」、「嫌い」という回答はみられなかった。一方、対照群では「大変好き」が73%、「どちらかというとき好き」が27%、「どちらかというとき嫌い」、「嫌い」という回答はみられなかった。

各学生の回答結果を表1に示すようにスコアに置き換え、両群の平均スコアを比較すると、活動群が 3.87 ± 0.32 、対照群が 3.73 ± 0.44 であった。T検定の結果、両群のスコアには統計的な有意差が認められた。

このように、活動群では対照群に比べて「大変好き」と回答した者の比率が高く、またスコアの平均も活動群が対照群に比べて有意に高いことがわかったが、活動的な性格特性をもつ者は、そうでない者に比べて音楽を聴くことを好む者が多く、音楽鑑賞にも積極的に取り組む傾向にあることがわかった。(表1、表2、表3を参照)

(2) 両群の「聴くことが好きな音楽のジャンル」についての回答結果

聴くことが好きな音楽のジャンルについての回答結果（複数回答）をみると、活動群では「Jポップ」が77%と最も多く、以下「洋楽」30%、「Kポップ」17%、「ロック」14%、「アニメソング」4%、「バンド」4%と続き、14のジャンルに及んだ。「特になし」という回答は3%であった。一方、対照群では「Jポップ」が67%と最も多く、以下「洋楽」21%、「ロック」11%、「アニメソング」11%、「吹奏楽」6%、「クラシック」6%、「邦楽」6%、「Kポップ」5%、「ボーカロイド」4%と続き、18のジャンルに及んだ。「特になし」という回答は4%であった。尚、「特になし」を除いた回答総数は、活動群が123、対照群が123であり、違いはみられなかった。

このように、両群とも「Jポップ」、「洋楽」という回答が1位、2位を占めたが、いずれも活動群でその比率が高かった。また「Kポップ」という回答は活動群では3番目に多かったが、対照群

では8番目であり、活動群に比べて低率であった。
(表4を参照)

(3) 両群の「歌を歌うことの好き嫌い」についての回答結果

歌を歌うことの好き嫌いについての回答結果を見ると、活動群では「大変好き」が39%、「どちらかというとき好き」が49%、「どちらかというとき嫌い」が13%、「嫌い」という回答はみられなかった。一方、対照群では「大変好き」が22%、「どちらかというとき好き」が52%、「どちらかというとき嫌い」が22%、「嫌い」が4%であった。

各学生の回答結果を表1に示すようにスコアに

置き換え、両群の平均スコアを比較すると、活動群が 3.26 ± 0.66 、対照群が 2.93 ± 0.74 であった。T検定の結果、両群のスコアには統計的な有意差が認められた。

このように、活動群では対照群に比べて「大変好き」または「どちらかというとき好き」と回答した者の比率が高く、またスコアの平均も活動群が対照群に比べて有意に高いことがわかったが、活動的な性格特性をもつ者は、そうでない者に比べて歌を歌うことを好む者が多く、歌唱活動にも積極的に取り組む傾向にあることがわかった。(表1、表2、表3を参照)

表2 音楽志向に関する質問項目の回答結果

区 分		活動群		対照群	
		人	%	人	%
音楽を聴くことの好き嫌い	音楽を聴くのが大変好きである	68	87.2	59	72.8
	どちらかというとき好きである	10	12.8	22	27.2
	どちらかというとき嫌いである	0	0.0	0	0.0
	嫌いである	0	0.0	0	0.0
歌を歌うことの好き嫌い	歌を歌うのが大変好きである	30	38.5	18	22.2
	どちらかというとき好きである	38	48.7	42	51.9
	どちらかというとき嫌いである	10	12.8	18	22.2
	嫌いである	0	0.0	3	3.7
楽器の演奏の好き嫌い	楽器の演奏が大変好きである	12	15.4	20	24.7
	どちらかというとき好きである	40	51.3	33	40.7
	どちらかというとき嫌いである	25	32.1	26	32.1
	嫌いである	1	1.3	2	2.5
子どもの頃の音楽の成績	音楽の成績がとても良かった	9	11.5	10	12.3
	どちらかというとき良かった	42	53.8	29	35.8
	ふつうだった	26	33.3	38	46.9
	どちらかというとき悪かった	1	1.3	4	4.9
	悪かった	0	0.0	0	0.0
全 体		78	100.0	81	100.0

表3 活動群と対照群のスコアの平均と有意差の有無

項 目	活動群 (78人)	対照群 (81人)	T値
音楽を聴くことの好き嫌い	3.87 ± 0.32	3.73 ± 0.44	2.287*
歌を歌うことの好き嫌い	3.26 ± 0.66	2.93 ± 0.74	2.964**
楽器演奏の好き嫌い	2.81 ± 0.68	2.88 ± 0.79	0.598
これまでの音楽の成績	3.76 ± 0.64	3.56 ± 0.76	1.792
スポーツへの関心	3.49 ± 0.58	2.74 ± 0.78	6.860**
スポーツ実践の好き嫌い	3.53 ± 0.57	2.70 ± 0.78	7.636**
これまでの体育の成績	3.97 ± 0.68	3.00 ± 1.04	6.933**

(注) ** $P < 0.01$ * $P < 0.05$

表4 聴くのが好きな音楽のジャンル(複数回答)

区 分	活動群		対照群	
	人	%	人	%
Jポップ	60	76.9	54	66.7
洋楽	23	29.5	17	21.0
ロック	11	14.1	9	11.1
Kポップ	13	16.7	4	4.9
アニメソング	3	3.8	9	11.1
吹奏楽	2	2.6	5	6.1
クラシック	1	1.3	5	6.1
バンド	3	3.8	2	2.5
邦楽	0	0.0	5	6.1
ボーカロイド	0	0.0	3	3.7
リズム&ブルース	2	2.6	0	0.0
バラード	0	0.0	2	2.5
ミュージカル	1	1.3	1	1.2
いろいろ	0	0.0	2	2.5
ラップ	0	0.0	1	1.2
洋楽以外	1	1.3	0	0.0
EDM	0	0.0	1	1.2
HIPHOP	1	1.3	0	0.0
演歌	1	1.3	0	0.0
歌謡曲	0	0.0	1	1.2
おだやかな曲	0	0.0	1	1.2
合唱	0	0.0	1	1.2
ポップス	1	1.3	0	0.0
特になし	2	2.6	3	3.7
全 体	78	100.0	81	100.0

表5 歌うのが好きな音楽のジャンル(複数回答)

区 分	活動群		対照群	
	人	%	人	%
Jポップ	53	67.9	42	51.9
Kポップ	11	14.1	3	3.7
アニメソング	1	1.3	10	12.3
洋楽	9	11.5	1	1.2
ロック	5	6.4	3	3.7
バラード	3	3.8	3	3.7
合唱	0	0.0	4	4.9
ボーカロイド	1	1.3	3	3.7
邦楽	1	1.3	3	3.7
いろいろ	3	3.8	1	1.2
バンド	1	1.3	1	1.2
ポップス	1	1.3	1	1.2
テレビ主題歌	0	0.0	1	1.2
テクノポップ	1	1.3	0	0.0
歌謡曲	0	0.0	1	1.2
昔の歌	1	1.3	0	0.0
特になし	11	14.1	23	28.4
全 体	78	100.0	81	100.0

(4) 両群の「歌うことが好きな音楽のジャンル」についての回答結果

歌うことが好きな音楽のジャンルについての回答結果(複数回答)をみると、活動群では「Jポッ

プ」が68%と最も多く、以下「Kポップ」14%、「洋楽」12%、「ロック」6%、「バラード」4%、「いろいろ」4%と続き、13のジャンルに及んだ。「特になし」という回答は14%であった。一方、対照群では「Jポップ」が52%と最も多く、以下「アニメソング」12%、「合唱」5%、「Kポップ」4%、「ロック」4%、「バラード」4%、「ボーカロイド」4%、「邦楽」4%と続き、14のジャンルに及んだ。「特になし」という回答は28%であった。尚、「特になし」を除いた回答総数は、活動群が91、対照群が77であり、活動群で多かった。

このように、両群とも「Jポップ」という回答が最も多かったが、活動群でその比率が高かった。2番目に多かったのは、活動群が「Kポップ」であるのに対して対照群では「アニメソング」と違いがみられた。また「洋楽」は活動群では3番目に多かったが、対照群ではごくわずかであった。「特になし」を除いた回答総数も活動群で多く、活動性の高低が歌うことの好きな歌のジャンルや回答数に影響を及ぼしていることが考えられた。(表5を参照)

(5) 両群の「楽器を演奏することの好き嫌い」についての回答結果

楽器を演奏することの好き嫌いについての回答結果をみると、活動群では「大変好き」が15%、「どちらかというとき」が51%、「どちらかというとき嫌い」が32%、「嫌い」が1%であった。一方、対照群では「大変好き」が25%、「どちらかというとき」が41%、「どちらかというとき嫌い」が32%、「嫌い」が3%であった。

各学生の回答結果を表1に示すようにスコアに置き換え、両群の平均スコアを比較すると、活動群が 2.81 ± 0.68 、対照群が 2.88 ± 0.79 であった。T検定の結果、両群のスコアには統計的な有意差は認められなかった。

このように、「大変好き」と「どちらかというとき」を合わせた比率は、両群ともほぼ同じであり、またスコアの平均にも有意差は認められず、活動性が高いか低いか楽器の演奏の好き嫌いや取り組みに影響を及ぼすという結果は得られなかった。(表1、表2、表3を参照)

表6 演奏することが好きな楽器(複数回答)

区 分	活動群		対照群	
	人	%	人	%
ピアノ	40	51.3	38	46.9
クラリネット	6	7.7	4	4.9
ギター	5	6.4	4	4.9
フルート	1	1.3	4	4.9
ホルン	1	1.3	3	3.7
打楽器全般	1	1.3	3	3.7
ドラム	2	2.6	2	2.5
サクソフォーン	1	1.3	2	2.5
タンバリン	2	2.6	1	1.2
ベース	1	1.3	2	2.5
トランペット	2	2.6	1	1.2
トロンボーン	0	0.0	2	2.5
ファゴット	2	2.6	0	0.0
リコーダー	1	1.3	1	1.2
いろいろ	1	1.3	1	1.2
オーボエ	0	0.0	1	1.2
ユーフォニウム	1	1.3	0	0.0
ハープ	0	0.0	1	1.2
バイオリン	0	0.0	1	1.2
シロフォン	0	0.0	1	1.2
木琴	0	0.0	1	1.2
鉄琴	0	0.0	1	1.2
ベル	1	1.3	0	0.0
和太鼓	1	1.3	0	0.0
特になし	27	34.6	29	35.8
全 体	78	100.0	81	100.0

(6) 両群の「演奏することの好きな楽器の種類」についての回答結果

演奏することが好きな楽器の種類についての回答結果(複数回答)をみると、活動群では「ピアノ」が51%と最も多く、以下「クラリネット」8%、「ギター」6%、「ドラム」3%、「タンバリン」3%、「トランペット」3%、「ファゴット」3%と続き、17種類に及んだ。「特になし」という回答は35%であった。一方、対照群では「ピアノ」が47%と最も多く、以下「クラリネット」5%、「フルート」5%、「ギター」5%、「ホルン」4%、「打楽器全般」4%、「サクソフォーン」3%、「タンバリン」3%、「ベース」3%、「トロンボーン」3%と続き、20種類に及んだ。「特になし」という回答は36%であった。尚、「特になし」を除いた回答総数は、活動群が69、対照群が74であり、大きな違いはみられなかった。

このように、両群とも「ピアノ」という回答が最も多く、回答者の比率にも大きな違いはみられなかった。2番目以下は両群とも回答数が少なかった

ため、両群で違いがみられるかどうかは比較しなかった。また「特になし」と回答した者の比率も両群でほぼ同率であり、違いはみられなかった。(表6を参照)

(7) 両群の「これまでの音楽の成績」についての回答結果

これまでの音楽の成績についての回答結果をみると、活動群では「とても良かった」が12%、「どちらかという良かった」が54%、「ふつうだった」が33%、「どちらかという悪かった」が1%、「悪かった」という回答はみられなかった。一方、対照群では「とても良かった」が12%、「どちらかという良かった」が36%、「ふつうだった」が47%、「どちらかという悪かった」が5%、「悪かった」という回答はみられなかった。

各学生の回答結果を表1に示すようにスコアに置き換え、両群の平均スコアを比較すると、活動群が 3.76 ± 0.64 、対照群が 3.56 ± 0.76 であった。T検定の結果、両群のスコアには統計的な有意差は認められなかった。

このように、「とても良かった」という回答は両群とも同率であったが、「どちらかという良かった」と回答した者の比率は活動群のほうが高く、活動性が高いことが音楽への取り組みもより積極的なものにし、結果的に音楽の成績にも反映しているのではないかと考えられた。(表1、表2、表3を参照)

(8) 両群の「スポーツへの関心」についての回答結果

スポーツへの関心についての回答結果をみると、活動群では「大変関心がある」が50%、「どちらかという関心がある」が44%、「どちらかという関心がない」が6%、「関心がない」という回答はみられなかった。一方、対照群では「大変関心がある」が15%、「どちらかという関心がある」が52%、「どちらかという関心がない」が26%、「関心がない」が7%であった。

各学生の回答結果を表1に示すようにスコアに置き換え、両群の平均スコアを比較すると、活動群が 3.49 ± 0.58 、対照群が 2.74 ± 0.78 であった。T検定の結果、両群のスコアには統計的な有意差が認められた。

このように、活動群は対照群に比べて、「大変

関心がある」または「どちらかというに関心がある」と回答した者の比率がとて高く、またスコアの平均も有意に高かったが、活動性が高いこと

がスポーツへの関心や取り組みにも大きく影響を及ぼしていることが考えられた。(表1、表3、表7を参照)

表7 スポーツ志向に関する質問項目の回答結果

区 分		活動群		対照群	
		人	%	人	%
スポーツへの関心	スポーツに大変関心がある	39	50.0	12	14.8
	どちらかというに関心がある	34	43.6	42	51.9
	どちらかというに関心がない	5	6.4	21	25.9
	関心がない	0	0.0	6	7.4
スポーツ実践の好き嫌い	スポーツをするのが大変好き	42	53.8	12	14.8
	どちらかというが好きである	32	41.0	38	46.9
	どちらかというと嫌いである	4	5.1	26	32.1
	嫌いである	0	0.0	5	6.2
子どもの頃の体育の成績	体育の成績がとて良かった	18	23.1	6	7.4
	どちらかという良かった	42	53.8	19	23.5
	ふつうだった	17	21.8	33	40.7
	どちらかというが悪かった	0	0.0	15	18.5
	悪かった	1	1.3	8	9.9
全 体		78	100.0	81	100.0

表8 関心のあるスポーツの種類(複数回答)

区 分	活動群		対照群	
	人	%	人	%
サッカー	27	34.6	15	18.5
バレーボール	24	30.8	12	14.8
野球	19	24.4	14	17.3
バスケット	15	19.2	14	17.3
バトミントン	10	12.8	10	12.3
テニス	7	9.0	9	11.1
陸上競技	6	7.7	3	3.7
水泳	5	6.4	3	3.7
スケート	6	7.7	2	2.5
卓球	3	3.8	4	4.9
球技全般	4	5.1	3	3.7
ダンス	3	3.8	1	1.2
空手	1	1.3	2	2.5
剣道	0	0.0	3	3.7
バレー	2	2.6	0	0.0
ハンドボール	1	1.3	1	1.2
新体操	2	2.6	0	0.0
弓道	1	1.3	0	0.0
筋トレ	1	1.3	0	0.0
自転車競技	0	0.0	1	1.2
スキー	1	1.3	0	0.0
ソフトボール	0	0.0	1	1.2
ドッジボール	1	1.3	0	0.0
ボクシング	1	1.3	0	0.0
ラグビー	1	1.3	0	0.0
ラケットスポーツ	0	0.0	1	1.2
ダーツ	0	0.0	1	1.2
ウィンタースポーツ	1	1.3	0	0.0
スポーツ全般	0	0.0	1	1.2
特になし	6	7.7	27	33.3
全 体	78	100.0	81	100.0

表9 実際に取り組んでみたいスポーツの種類(複数回答)

区 分	活動群		対照群	
	人	%	人	%
バスケットボール	27	34.6	15	18.5
バトミントン	24	30.8	12	14.8
バレーボール	19	24.4	14	17.3
テニス	15	19.2	14	17.3
サッカー	10	12.8	10	12.3
水泳	7	9.0	9	11.1
卓球	6	7.7	3	3.7
陸上競技	5	6.4	3	3.7
野球	6	7.7	2	2.5
球技全般	3	3.8	4	4.9
ダンス	4	5.1	3	3.7
ソフトボール	3	3.8	1	1.2
ハンドボール	1	1.3	2	2.5
スポーツ全般	0	0.0	3	3.7
剣道	2	2.6	0	0.0
新体操	1	1.3	1	1.2
ドッジボール	2	2.6	0	0.0
ラケットスポーツ	1	1.3	0	0.0
弓道	1	1.3	0	0.0
バレー	0	0.0	1	1.2
ホッケー	1	1.3	0	0.0
自転車競技	0	0.0	1	1.2
スケート	1	1.3	0	0.0
なわとび	1	1.3	0	0.0
筋トレ	1	1.3	0	0.0
アスレチック	0	0.0	1	1.2
ジョギング	0	0.0	1	1.2
集団でやるスポーツ	1	1.3	0	0.0
身体活動	0	0.0	1	1.2
特になし	6	7.7	27	33.3
全 体	78	100.0	81	100.0

(9) 両群の「関心のあるスポーツの種類」についての回答結果

関心のあるスポーツの種類についての回答結果(複数回答)をみると、活動群では「サッカー」が35%と最も多く、以下「バレーボール」31%、「野球」24%、「バスケット」19%、「バトミントン」13%、「テニス」9%、「陸上競技」8%、「スケート」8%、「水泳」6%と続き、23種類に及んだ。「特になし」という回答は8%であった。一方、対照群では「サッカー」が19%と最も多く、以下「野球」17%、「バスケット」17%、「バレーボール」15%、「バトミントン」12%、「テニス」11%と続き、20種類に及んだ。「特になし」という回答は33%であった。尚、「特になし」を除いた回答総数は、活動群が142、対照群が101であり、活動群で回答数が多かった。

このように、両群とも「サッカー」という回答が最も多かったが、回答者の比率は活動群が対照群を大きく上回っていた。「バレーボール」という回答は、活動群では2番目に多かったが対照群では4番目であり、回答者の比率にも両群で大きな違いがみられた。「特になし」という回答は対照群で多く、活動群のおよそ3倍にも及んだ。また「特になし」を除いた回答総数は、活動群が対照群を大きく上回っており、これらのことから、活動群では活動的であるという性格特性により、スポーツに対してもより積極的にとらえ、高い関心をもつ者が多く、逆に対照群では活動群に比べるとスポーツへの関心が高い者の比率がそれほど高くないのではないかと考えられた。(表8を参照)

(10) 両群の「スポーツ実践の好き嫌い」についての回答結果

スポーツ実践の好き嫌いについての回答結果をみると、活動群では「大変好き」が54%、「どちらかというとき」が41%、「どちらかというとき嫌い」が6%、「嫌い」という回答はみられなかった。一方、対照群では「大変好き」が15%、「どちらかというとき」が47%、「どちらかというとき嫌い」が32%、「嫌い」が6%であった。

各学生の回答結果を表1に示すようにスコアに置き換え、両群の平均スコアを比較すると、活動群が 3.53 ± 0.57 、対照群が 2.70 ± 0.78 であった。T

検定の結果、両群のスコアには統計的な有意差が認められた。

このように、活動群は対照群に比べて、「大変好き」または「どちらかというとき」と回答した者の比率がとて高く、またスコアの平均も有意に高かったが、活動性が高いことがスポーツを好み、積極的にスポーツに取り組もうとする姿勢につながっているものと考えられた。(表1、表3、表7を参照)

(11) 両群の「実践することが好きなスポーツの種類」についての回答結果

実践することが好きなスポーツの種類についての回答結果(複数回答)をみると、活動群では「バスケット」が31%と最も多く、以下「バレーボール」27%、「バトミントン」24%、「テニス」18%、「サッカー」12%、「水泳」8%、「陸上競技」8%、「球技全般」8%と続き、24種類に及んだ。「特になし」という回答は5%であった。一方、対照群では「バトミントン」が20%と最も多く、以下「バスケット」19%、「バレーボール」15%、「テニス」12%、「サッカー」9%、「卓球」6%と続き、20種類に及んだ。「特になし」という回答は41%であった。尚、「特になし」を除いた回答総数は、活動群が133、対照群が86であり、活動群で非常に回答数が多かった。

このように、活動群では「バスケット」という回答が最も多かったが、対照群では「バトミントン」が最も多く、また2番目に多かった種目でも両群で違いがみられた。「特になし」を除いた回答総数でも活動群は対照群に比べてひじょうに多かった。さらに「特になし」という回答は活動群では少なかったが、対照群では4割にも達し、両群で大きな違いがみられた。これらのことから、活動群では活動的であるという性格特性により、スポーツに対しても積極的に取り組む者が非常に多いことが考えられた。(表9を参照)

(12) 両群の「これまでの体育の成績」についての回答結果

これまでの体育の成績についての回答結果をみると、活動群では「とても良かった」が23%、「どちらかというとき良かった」が54%、「ふつうだった」が22%、「どちらかというとき悪かった」という回答はみられず、「悪かった」が1%であった。

一方、対照群では「とても良かった」が7%、「どちらかという良かった」が24%、「ふつうだった」が41%、「どちらかという悪かった」が19%、「悪かった」が10%であった。

各学生の回答結果を表1に示すようにスコアに置き換え、両群の平均スコアを比較すると、活動群が 3.97 ± 0.68 、対照群が 3.00 ± 1.04 であった。T検定の結果、両群のスコアには統計的な有意差が認められた。

このように、活動群は対照群に比べて、「とても良かった」または「どちらかという良かった」と回答した者の比率がとて高く、またスコアの平均も有意に高かったが、活動性が高いことがスポーツや学校での体育への積極的な取り組みにつながり、結果的に体育の成績にも反映しているのではないかと考えられた。(表1、表3、表7を参照)

4. まとめ

学生の活動性の高さとスポーツ志向・音楽志向の関連性の分析を通して次のようなことが明らかになった。

- (1) 活動群は対照群に比べて、音楽を聴くことを好む者、歌を歌うことを好む者、これまで音楽の成績が良かった者が多い傾向にあった。
- (2) 聴くことが好きな音楽のジャンル、歌うことが好きな音楽のジャンルは、両群とも「Jポップ」という回答が最も多かったが、いずれも活動群のほうが回答者の比率が高かった。
- (3) 楽器の演奏の好き嫌いに関しては、活動群と対照群で大きな差はみられなかった。
- (4) 演奏することが好きな楽器の種類は、両群とも「ピアノ」という回答が最も多く、回答者の比率にも大きな違いはみられなかった。
- (5) 活動群は対照群に比べて、スポーツへの関心が高い者、スポーツの実践を好む者、これまで体育の成績が良かった者が多い傾向にあった。
- (6) 関心のあるスポーツの種目は、両群とも「サッカー」という回答が最も多かったが、活動群のほうが回答者の比率が高かった。「特になし」という回答は対照群で多く、活動群のおよそ3倍にも及んだ。
- (7) 実際に取り組んでみたいスポーツ種目は、活

動群では「バスケット」が最も多かったが、対照群では「バドミントン」が最も多く、両群で違いがみられた。「特になし」という回答は活動群では少なかったが、対照群では4割にも達し、両群で大きな違いがみられた。

<注>

- 1) 澤田優子、澤田孝二:短期大学学生の音楽志向・スポーツ志向・性格特性の関連性の有無の分析, 山梨学院短期大学研究紀要第38巻, 83-91. (2018)
- 2) 岡 朋子:音楽的能力と他の能力について—リズムに関する音楽的能力と運動能力との関係—, 兵庫教育大学学校教育学部卒業論文, 1-16. (1995)
- 3) 麻 書洋:音楽と身体能力との関連性について—好みの音楽聴取視点として—, 人間発達学研究第6号, 129-130. (2015)
- 4) 杵鞭宏美:スポーツ活動と音楽聴取に関する基本的考察—大学生と社会人によるアンケート調査から—, 昭和音楽大学研究紀要第26号, 48-60. (2006)
- 5) 広瀬優花、岩永 誠、安田晶子:大学生の音楽の好みと性格の関連—性格特性がジャンルの一般的な好みを与える影響—, 日本心理学会第76回大会発表論文集, 678. (2012)
- 6) 福富和夫、永井正規、中村好一、柳川 洋:ヘルスサイエンスのための基本統計学, 南山堂, 76-80. (1989)

<参考文献>

- ・澤田優子、澤田孝二:音楽鑑賞のリラクゼーション効果についての一考察, 山梨学院短期大学研究紀要第36巻, 115-120. (2016)
- ・古佐小基史:トータルヘルスと音楽, 保健の科学第54巻, 703-707. (2012)
- ・小島正憲:音楽がスポーツパフォーマンスに与える影響, 東海学院大学研究紀要第8号, 217-224. (2014)
- ・大森芙美:運動中の身体に及ぼす音楽の影響, 東京女子体育大学研究紀要第20号, 62-78. (1985)
- ・貫 行子、長田 乾、川上 央:音楽聴取による脳波変動と気分変化、音楽選好と性格特性の関連性, 情報処理学会研究報告音楽情報科学, 35-40. (2004)
- ・小竹訓子、中村恵子、高橋由紀:音楽療法のリラクゼーション効果に関する研究, 県立長崎シーボルト大学研究紀要第5号, 1-10. (2005)

-
- 松本じゅん子：音楽の気分誘導効果に関する実証的研究，教育心理学研究第50巻，23－32. (2002)
 - 荒金英理子、川出富貴子：音を聴くこと、歌を歌うことによるリラクセーション作用－身体的および心理的变化－，川崎医療福祉学会誌第19巻，105－111. (2009)
 - 澤田孝二、澤田由美：短期大学学生の性格特性がスポーツ行動および心身の健康に及ぼす影響，山梨学院短期大学研究紀要第34巻，63－73. (2014)

